

## 訴追された裁判官

——「クナルパンティ・エピソード」をめぐる——

加 島 健

1822年4月末、ホフマンの死の2か月前に、政治的権力による検閲・削除を経て『蚤の親方』は刊行された。大審院判事の職にあり、いわば国家権力側に立って犯罪者を裁く立場にあったホフマンが、彼自身国家権力からそれに敵対する人物として扱われることになった結果である。ホフマンは、当時、時代の政治的紛糾に巻き込まれていたのである。ホフマン晩年、ベルリンの判事時代に書かれた作品は時代諷刺が特長であるが、中でも特に政治に関する諷刺が顕著に見受けられる。本小論では、政治的諷刺の色合いが濃い『蚤の親方』の中にあり、官憲から問題にされた、いわゆる「クナルパンティ・エピソード」を中心に、判事ホフマンがいかに時代と関わり、文筆という形でいかに政治的権力と対峙したかを探っていくことにする。まず、その当時の時代背景を見ておきたい。

ウィーン会議後、ヨーロッパに平和と新たな政治形態がもたらされるはずであった。ところが「ウィーン会議を主導したのは、民族主義的・自由主義的要求を認めずフランス革命前の状態への回復をめざす正統主義・復古主義と、列強の勢力均衡という二大原則であった」<sup>1)</sup>。その結果、ドイツにもたらされたものは、38もの中小国家分立であり、それぞれが相互に同等の権利を有していた。フランス革命前の時代に抛り所を求めようとする国も現れ、ヘッセン公国では弁髪令が再度導入されるありさまであった。

古きものが復活し、ヨーロッパ統一という夢が破れると、民衆の間には、共和国的な憲法への要求や小国家乱立を収束させ、統一された「全ドイツ」の国家連合をつくる要求が高まってきた。「解放戦争を通じて、フランス革命の自由・平等・博愛の理念は、ドイツにもその種子を播き落とし」<sup>2)</sup>

ていたのである。

自由民主化運動はとりわけ、大学教授、学生、作家といった教養インテリ層の間で広まっていった。そうした中、1815年6月イエーナ大学で学生組合（ブルシェンシャフト）が結成され、その運動は各地の大学にも波及した。しかし、こういった抵抗運動は組織として統一されたものではなく、むしろさまざまな流れが平行あるいは互いに混ざり合っていただけであった。

統一と自由をめざす過激な組織は、「体操の父」フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン（1778-1852）<sup>3)</sup>によって設立された。ヤーンは1811年ベルリンのハーゼンハイデに最初の体操道場を作った。ヤーンは単なる体操家ではなかった。身体の育成は彼の政治信条と結び付いており、彼の主導する体操は民族主義的色彩を帯びていた。彼の信条は、外国勢力に抵抗するためには、中・高生徒や大学生は精神的にも肉体的にも鍛えられなければならないという愛国的な思想を基調としていた。彼の体操道場は、改革を目指す運動家の思想の伝播場となり、体操道はベルリンから全国各地に急速に広まっていった。ヤーンの体操道を支持する若者たちは古いドイツ風衣装をまとい、大音声を発したり、誇張された言葉を使ったりして奇矯の印象を与えるものであったため、年配のひとたちにとっては眉をひそめさせる存在でもあった。ヤーンが体操道場を開いた頃は、政府もその運動を支持し、道場を各地に開くことを許可していたが、次第に国家は監視の目を向けるようになり、ついにはヤーン自身が逮捕される事態に至るのである。

ホフマン自身、後にヤーンの裁判に関わるわけであるが、粗野な体操家にあまり好印象は持っていなかったようだ。ある逸話の中でヤーンのこと

を「ホップ・ステップ・ジャンプの親方」とイローニッシュに語っている。<sup>4)</sup>しかし、ホフマンはヤーンを徹底的に弁護し、釈放を求めている。裁判の際、ヤーンの奇行はホフマンを苦しめることになるが、判決書の中でヤーンの奇行ぶりをいくつも紹介して、それを逆説的に弁護し、ヤーンに向けられた罪状をことごとく論破していく。たとえば、

「さらにヤーンは次のようなことまで提案している。守りの弱いところをついて外敵がドイツの国土に侵入してくるのを防ぐために、人工の砂漠を設けよ、と言うのである。……そしてこの砂漠には、赤鹿に黒いのしし、大鹿、野牛はもとより、ありとあらゆる種類の猛獣たちを放し飼いにしておくのだ、という。……飢えた狼に熊などは、密入国者や密偵、浮浪者たちのよい見張り役となろう。……肉食獣がお互いに共喰いを始めたら、羊やフランス牛やお払い箱になった馬などを餌としてあてがえばよい。この砂漠地帯に住む人々が野獣たちと繰り広げる不断の闘いは、国土防衛の最もすぐれた訓練になる云々」<sup>5)</sup>

このような「ヤーンの「たわけぶり」を真面目に受け取るなら、そのように受け取った本人が笑いのものになる覚悟が必要だ」<sup>6)</sup>とホフマンは述べている。

ヤーンの体操協会と並んで政治的反動に不満を抱いていたのは、各地に組織された学生組合であった。学生組合は、当初は学生組織の改革を目指していたが、次第に政治的性格を帯びるものとなっていった。彼らの運動は、統一された自由な祖国を求める運動に発展し、「名誉・自由・祖国」が彼らのスローガンになった。彼らは黒・赤・金の三色旗(現在のドイツ国旗)を運動の旗とした。学生組合の中でも、ギーセンの「黒」(黒い古ドイツ風の上着に由来する)のやイエーナの「絶対者」と称する組合がその中核をなしていた。そういった学生組合は、暴力は革命遂行のひとつの手段であり、政治的暗殺すら必要であり、道義的に

も容認されるものであると考えるほどの過激思想を持っていた。しかしながら、そういった過激思想は、実際はほとんど現実的な力を持っておらず、むしろ、プロイセン警察長官フォン・カンプツに「扇動的策謀」と言わしめ、取り締まりの対象にされるきっかけを与えるものとなっただけだった。

そんな中、1817年10月18日、各地の学生組合は、ルターの宗教改革300年とライプツィヒ戦勝4周年を記念して、ルターがかつて新訳聖書をドイツ語に訳した記念の地ヴァルトブルクの古城に集結し、祭典を行った。祭典では、賛美歌が歌われ、自由の賛歌と演説が節度をもって平穩の内に行われた。若者たちは、感激と歓喜に酔いしれた。

ところが、祭典の最初の晩に、ヤーンによって非ドイツ的な著作の焚書が提案され実行に移された。火にくべられた著作は、イエーナのヴェッセルヘフト印刷所から持ち出された大量の反古紙の束にすぎなかったが、その中にはハラーの『国家学の復古』、コッツェブーの『ドイツ史』、『ナポレオン法典』や、コーゼガルテンやインマーマン、ツァハリアス・ヴェルナーらの著作があった。カンプツの著した『地方警察法典』もその中に含まれていた。最後には、プロイセン騎兵の胴着やヘッセン兵の弁髪、オーストリア下士官の杖が火中に投ぜられた。<sup>7)</sup>

ヴァルトブルクの祭典を機に、学生組合や体操道はいつそう世間の注目を浴びるようになったが、それと同時に、それらは国家にとって不愉快な存在になっていった。学生組合やヤーンはカンプツを敵に回してしまったのである。

体制側に抑圧の口実を与える格好の事件が起きた。学生組合員カール・ルートヴィヒ・ザントが、作家アウグスト・フォン・コッツェブーをマンハイムで刺殺したのだ。1819年3月23日のことであった。

コッツェブーは、ドイツの文学や世論について定期的にベテルスブルクに報告を送っていることが明らかになって以来、ロシアに雇われたスパイということになっていた。彼は学生組合員たちが

標榜する自由思想、祖国愛を嘲笑、否定していたので、学生組合員にとっては、祖国の裏切り者であり、カンプツと並ぶ悪者であった。しかし、コツェブーは政治的には全く影響力のない作家であり、彼の生き死にはドイツ国民にとっては実際どうでもよいことであったのであるが、ザントが処刑されると、多くの人々はザントを英雄視し、「断頭台の露と消えてからは、人々は先を争ってこの殉教者の血のついた木のおがくずを求め、さながら聖遺物を求めるかのような様相を呈した」。<sup>8)</sup>それは、政府に対する不満が鬱積していた現れであろう。

コツェブー暗殺によって、国民の間に広まっていた体制側に対する不満、怒りが顕在化し、暗殺者を英雄視する事態にまで及ぶと、メッテルニヒはカールスバートに諸邦政府代表者会議を招集した。そこで、学生組合の禁止や出版物の検閲などが決議された。いわゆるカールスバートの決議(1819年)である。ヤーンは逮捕され、学生組合員には厳しい監視の目が向けられるようになった。デマゴグ狩りの名の下に、大学人追放、言論統制が実施されたのである。

1819年夏、マインツに中央審査委員会が発足した。オーストリアとプロイセンが中心になり、ドイツ連邦諸国の不穏な動きを追求し懲戒する組織であった。委員会の中心人物は、プロイセンでは警察長官カンプツであった。彼のやりかたは「まったく何の根拠もなしに嫌疑をかけることさえためらわなかったのである」。<sup>9)</sup>

1819年10月、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世は、扇動活動家を取り調べるための司法機関として「プロイセン国王直属調査委員会」を設置した。この委員会の長は大審院副院長トリッチュラーで、ホフマンはその委員のひとりに任命された。<sup>10)</sup>委員会の主要目的は、「個々の犯罪者をひとり残らず糾明すること、及びプロイセン国家のみならず全ドイツがさらされている危険を未然に防ぐこと」<sup>11)</sup>であった。

ホフマンは「思想信条が犯罪行為となって現れない以上、思想信条だけを刑事調査の対象とすることはできない」<sup>12)</sup>という裁判官としての原則に

従って判決を下していった。ホフマンは多くの事件で、法的事実を詳細に検討し、被告人の釈放を要求した。そのことは警察長官カンプツを怒らせ、両者の対立を深めることとなった。

ゲオルク・ルートヴィヒ・レーディガーが政府転覆秘密結社活動の疑いで逮捕されたとき、ホフマンは、そのような団体は本当に存在したのか、それは「秘密」結社だったのか、その結社は国家を危うくするものだったのか、等々の疑問点を列挙し、起訴理由が薄弱であるという理由からレーディガーの釈放を要求した。<sup>13)</sup>

プロイセン国王は、直属調査委員会は法的立場にのみ固執し、より高い国家警察的目的を無視しているとして、国家警察的利益を代表する内閣委員会なるものを新たに設けた。その結果、直属調査委員会は単なる法的な役所となり、内閣委員会の付属機関という位置づけになってしまった。直属調査委員会で決定されたものでも、体制側にとって好ましくないものは却下されるようになった。内閣委員会の構成メンバーは、宰相ハルデンベルク、法務大臣キルヒアイゼン、内務大臣シュックマン、ヴィトゲンシュタイン、警察長官カンプツ等であったが、この委員会の実質的实力者はカンプツであった。この委員会の使命は、カンプツが行っていた扇動者弾圧の推進に他ならなかった。

直属調査委員会と内閣委員会の衝突が最も顕著に現れたのは、「体操の父」ヤーンの一件であった。ヤーンは1819年7月13日に逮捕された。ホフマンはヤーンに対してなされた告発を詳細に検討し、ヤーンの釈放を求めた。直属調査委員会はホフマンの判決文を基に、ヤーンの釈放を決議した。しかし、内閣委員会はその申し立てを拒絶した。それに対して直属調査委員会は、決議が実施されないのなら裁判官の職を辞す決意である、といった強い態度で臨んだ。その結果、内閣委員会は折れ、ヤーンをコルベルクへ国外追放するということで妥協した。

ヤーンをめぐるのは、その他にもホフマンと内閣委員会、とりわけカンプツとの対立があった。

1819年11月19日、ヤーンはカンプツを名譽

毀損で告訴した。カンプツはヤーンの罪をすでに実証されたこととして新聞に発表していたのである。ホフマンがその告訴を受理した。しかし、法務大臣キルヒアイゼンは、シュックマンとカンプツの圧力でその告訴を却下するよう命じた。ホフマンと大審院は断固抵抗した。しかし、国王が介入する事態となり、勅令によりヤーンの訴えは却下される。

その後も直属調査委員会と内閣委員会の衝突は続いた。扇動的秘密運動の嫌疑で地方長官次席ルートヴィヒ・フォン・ミュレンフェルスが逮捕された際も、ホフマンはミュレンフェルスに何の犯罪事実もないことを明らかにし、直属調査委員会はその報告に基づいて釈放を決議した。またもやホフマンとカンプツは対立した。

ホフマンは、直属調査委員会といった特別職へ任用されたことについて、「仕事上の地位はまさに私が望んでいた種類の物である」<sup>14)</sup>と、バンベルクの旧友である医師シュパイアーに書き送っているように、一面では名誉なことと受けとめてはいた。しかし、他面、竹馬の友ヒッペルへの手紙からは直属調査委員会の仕事がホフマンを苦しめていた様子が伺える。

「ちょうどあのころ、いわゆる扇動活動家による陰謀とやらの調査のために設置された直属調査委員会の委員にぼくは任命された。君はぼくのことをよく知っているから、そのときのぼく気分がどんなものだったかよくわかってもらえるだろう。ぼくの目の前でとぐろまいていたのは、恐るべき独断専行、法という法をことごとく無遠慮に踏みじり、個人的な敵意をむきだしにする世界だった。——君に対してははじめにわざわざ断るまでもないことだが、ぼくも人並みに実直な、心から国を愛する男のひとりとして当時抱いていた確信は今も変わらない。少数のわからず屋の若者たちのたわけた行動には制約をもうけなくてはならなかった。この手の行動が恐ろしい形で噴出し始めたとおってはおさらだった。……委員会ができたのは、法的な手段によって厳罰に処し、よからぬ方向に

流れぬよう対処するちょうどよい機会だった。それなのにそうはならなかった。講じられた処置というのは、反抗に対する処分にとどまらず、思想信条にまで向けられていたのだよ。」<sup>15)</sup>

恣意的な逮捕、そして良心的かつ厳密に下した司法判決の軽視、さらには内閣委員会の介入、こういったことがホフマンの不満を増大させていった。

ホフマンはその不満のはけ口を作品に昇華させた。学生組合の活動やデマゴグ狩りを作品にしようという計画は、直属調査委員会時代にホフマンの頭の中にあっただと考えられる。1820年1月20日のルートヴィヒ・ローベルト（1788-1832, 外交官、作家）の手紙は記している。

「お約束なさっていたメールヒェンはすでにお心の中にあるでしょうから、約束の期日までには楽々とこちらに送ってくださることでしょう。……貴殿の近頃の職務がメールヒェンの素材を十分に提供してくれることでしょう。扇動的策謀との闘いがハレゴリーリッシュ（地名ハレとアレゴリー的をかけている）かつイエーナローギッシュ（学生組合があった地名イエーナとアナロジー的をかけている）に描かれるのでしょう。」<sup>16)</sup>

この手紙にある「メールヒェン」とは、時期的に考えて『蚤の親方』を指していると考えられる。実際、ホフマンは『蚤の親方』が出版される前から、警察や内閣委員会のやり方を諷刺によって明らかにしようという意図があった。彼はそのことを、不用意にも社交界や居酒屋でしゃべっていたのである。そのことについて、ヒッツィヒは書いている。

「本の中で、あれやこれや諷刺しようと思っていたことを、ホフマンが不注意にも事前に話してしまうようなことをしてかきなけば、その作品を読んだ大衆は、そう厳密に作品を読むわけではないのだから、ホフマンが意図していた

ことに気付くことはなかっただろうに。」<sup>17)</sup>

また、ホフマンがベルリンで知り合った作家ファルンハーゲンは次のように日記に書いている。

「大審院判事ホフマン氏は、ある諧謔的な本を書いているが、その中で、調書からほとんどそのままに書かれた扇動的事件がこっぴどく冷笑されている。」<sup>18)</sup>

ホフマンの新作の話はベルリン中で噂になっていた。その噂がカンプツの耳に入らないはずはなかった。諷刺の対象は自分だと直感したカンプツは対抗手段をとる。カンプツは、宿敵ホフマンを叩く絶好の機会と捉えた。ホフマンが訴訟手続きの記録資料から引用しているという噂が本当ならば、裁判官としての守秘義務を犯したことになり、ホフマンにその責めを負わせることができる。カンプツは問題とされた小説原稿の押収にとりかかる。地獄耳のファルンハーゲンは、「ホフマンは彼の予定していた印刷物の件で、……法務大臣(キルヒアイゼン)から呼び出しを受けるらしい」と1月14日の日記に書いた。<sup>19)</sup>

カンプツは1月17日にドクター・クリントヴォルトを代理としてフランクフルトに向かわせた。出版を差し止め、原稿を押収するのが彼の任務だった。ホフマンはその数日前にその噂を聞きつけ、出版人ヴィルマンズに手紙を送り、メールヒェンの問題の個所の削除を依頼した。

「クナルパンティがペレグリヌス・テウス氏に対して起こした奇妙な訴訟事件の物語、しかも、第五の事件にはこう書いてあります：クナルパンティは疑わしい個所を、ペレグリヌスの書類から編集し、その編集を非常に喜んだ。さらに、原稿の縁に書き加えられている：人々はクナルパンティが通り過ぎ、行ってしまった場合など、鼻をつまみたいくらいに思ったなど。この二つの個所は消さなければならないのです。ある事情のために、大変不都合を来すかも知れませんか。そんなわけで、これらの場所

を印刷前に削除してくださるようお願いいたします。」<sup>20)</sup>

しかし、ヴィルマンズは手元にあった原稿、すでに印刷された個所、ホフマンからの削除依頼の手紙などすべてを引き渡してしまった。そして、その手紙は、ホフマン自身が自分の行動に疚しさを感じている証拠だと取られる結果となった。

カンプツはすぐさま押収した書類を細密に調べ、『蚤の親方』の第4および第5の事件に挿入された「クナルパンティ・エピソード」のクナルパンティは他ならぬ自分のことであると悟り、さらには、そこには裁判記録が使用されていると主張した。

クナルパンティ・エピソードとはあらまし次のようなものである。

クリスマスの前夜、フランクフルトでひとりの高貴な女性がなんとも不可解な方法で誘拐されたという噂が広まった。しかし、調査の結果、行方不明になった女性はいないということが判明し、市参事会は噂に根も葉もなかったと断定し、一件落着と決定した。

ところが、宮中枢密顧問官クナルパンティと名乗る人物が現れた。彼の話では、彼は「さる小さな領主の宮廷の、なんでも屋という役回りを拝命した重要人物」<sup>21)</sup>であった。また、彼によると、その頃、誰も知らないことではあったが、その領主の娘のひとりが行方不明になっていたというのである。慢性金欠病の主君のために、できる限りの金を借り集めるべくフランクフルトに来た彼は、高貴な女性が誘拐されたという噂を耳にして、早速主君にその旨知らせたのであった。その領主は、直ちに犯人を追跡し、姫を見つけ出せという訓令を発した。その命令書には市参事会宛の書面も付いており、クナルパンティも調査団の一員に加え、犯人の逮捕と裁判を迅速に進めてもらいたいと要請してあった。それに対して、参事官は、誘拐された女性の一件は根拠のない噂と判明したので、誘拐犯人探索は論外で、調査は不要と答えた。<sup>22)</sup>

それに対するクナルパンティの言い分は非常に

ユニークである。

「クナルパンティは右の答弁すべてをしたり顔の笑みを浮かべて聞いていたが、やおら口をきり、自分の並外れた明敏さによって、すでに犯人の目星がついておると断言した。——もし犯人がおるならば、犯行もまた行われたにちがいないとものものの道理に訴えてから、クナルパンティはこう論述した。まず犯人を見つけること、すれば犯行はおのずから見つかる。被告が頑固なばかりに起訴事項が確定できない場合でも、被告のちょっとした隙を責め立てて逮捕にまでもっていけないようでは、軽薄にして目先のきかない裁判官である。自分はいまこの場で、わが姫君の誘拐犯人逮捕を提議する。してその犯人とは、余人にあらず、ペレグリヌス・テウス氏にして、自分はすでに前々から目星をつけておったのであり、関係書類を即刻押収していただきたい。」<sup>23)</sup>

こうしてテウスは逮捕され、書類は押収された。参事官とクナルパンティは書類の山を「一つひとつ、手紙類も一通残らず、ほんのちょっとした書付までも（洗濯屋の伝表やメニューのたぐいも例外とせず）、上から下まで慎重に目を通していったのだが、さて、この調査の結論となると、両名の意見は厳しく対立するところとなった」。<sup>24)</sup>

参事官、その人物にホフマン自身を重ね合わせることができるが、は犯罪に関連するような一語も押収した書類にはなかったと断言したのに対して、クナルパンティの「鋭い鷹の目は、ペレグリヌス・テウス君がはなはだ危険な人物であることを裏書きする幾多の個所を見つけ出したのである」。<sup>25)</sup>

たとえば、テウスの昔の日記にある次のような個所、「なんといってもこの誘拐には、何かしら高貴で麗しいところがある」あるいは「しかしぼくは中から一番美しいものをひっさらった！」<sup>26)</sup>。しかし、誘拐（Entführung）だの、ひっさらう（entführen）だの、ひっさらった（entführt）という言葉は、ごく当たり前の文章に混じっていただ

けであったが、クナルパンティは「赤鉛筆で太い下線を引いたばかりか、抜き出して別紙にまとめて清書したのである」。<sup>27)</sup>

さらには、日記の中にあった次のようなくだりを指摘する。「本日は残念ながら、ものすごく（mord）大儀だ。」<sup>28)</sup> しかも、mordの綴りには三本もの下線が引いてあった。クナルパンティは主張する、「mordはすなわち殺人（mord）に他ならず、しかして本日、人殺しが大儀であると残念がるとは、犯罪者の意志のありどころを白日の下にさらしているではないか！」と。<sup>29)</sup> ちなみに、クナルパンティ（Knarrpanti）という名前は、Narr Kampitz（阿呆カンプツ）のアナグラムと解釈できる。クナルパンティが犯人をでっち上げる手法は、そのまま現実のカンプツにも当てはまったわけで、名前ひとつをとってもカンプツに対する痛烈な当てこすりが表明されているというのは誰の目にも明らかであった。

カンプツがとりわけ問題としたのは、ホフマンから押収した原稿の上記個所である。カンプツは、扇動的策動の容疑で逮捕した大学生グスタフ・アースヴェールスから押収した日記に、「ひどく大儀（Mordfaul）」だという単語を発見し、そこに赤の下線を引いていたことを思い出したのである。カンプツは早速アースヴェールスの日記を取り寄せ、彼の記憶が正しかったことを確認し、ホフマンが職務上知り得た情報を引用したという心証を得たのである。

カンプツはすぐに内務大臣シュックマンに報告書を書き、「直属調査委員会は参事官の形で、内閣委員会——もしくは少なくとも当該委員会の責任者（カンプツ）——は宮中枢密顧問官クナルパンティの形で、そして、前者参事官／審問者としてホフマン氏自身ですが／は極めて有利に、それに対して、後者の内閣委員会もしくはクナルパンティはそれに比して不利な光が当てられて描写されております」<sup>30)</sup>と主張した。

カンプツはさらにアースヴェールスの日記に言及した後、大審院判事ホフマンは、1) 国王陛下及び上司に払うべき忠誠と畏敬を侵害した、2) 職務上の守秘義務を破った、3) 職務遂行中の国

家官吏を公然と著しく誹謗した、と結論づける。<sup>31)</sup>

カンブツの報告を受けた内務大臣シュックマンは、カンブツの意に添った陳述書を宰相ハルデンベルクに提出し、ホフマンに対して断固たる処分をとるよう要請した。

ホフマンの直属調査委員会からの排除とインスターブルクへの移動の決定は、すぐにはなされなかった。国王は法務大臣キルヒアイゼンに命じて、24時間以内に大審院院長ヴォルダーマンによる聴取をさせることとした。

その頃、ホフマンは病床にあった。友人のハインリヒ・アルブレヒト・マイアー医師は、ホフマンは「熱を伴った、心高痛を患っており、そのため、昨日は2度も瀉血した」<sup>32)</sup>という診断書を書き、訊問は不可能だとした。マイアーおよびヒッペルの献身的働きにより、ホフマンの事情聴取は延期された。その間にホフマンは弁明書を書くチャンスを与えられた。

1822年2月23日、ヴォルダーマンによる聴取の翌日、書記官ヘッカーがホフマン宅に調書作成のために出向いた。そこで弁明書が筆記され、ホフマンが末尾に署名したのであるが、その弁明書は事前を送付され、それをヘッカーが持って行ってその場で単に清書したものか、あるいは、ホフマンの病は脊髄から両手にまで麻痺が及んでいたため、その場で弁明書を口述したのかははっきりしていない。いずれにしても、書き取りを翌日に延ばしたことによって、ヴォルダーマンによって行われた審問をもう一度じっくりと考え直す機会がホフマンに与えられたわけである。書き取り当日、ホフマンは非常に良くできた弁明書をヘッカーに手渡した。ホフマンはの中で、特に次の2点にしばって弁明している。

まず、ホフマンに向けられた非難に対して、クナルパンティ・エピソードは表現手段にすぎず、奇妙な訴訟を含んだ当該事件が、「いかにしてこの物語の骨組み全体から、そしてまた、いかにして、全体を構成するのに必要不可欠な一部として登場してくる人物の性格描写から、自ずと生み出されてきたか、また、全体の性格描写をいっそう

明らかにさせるのに寄与しない言葉など、一語も含まれてはいない」<sup>33)</sup>とホフマンは説明する。さらに、「著者はこの事件を通して、メールヒェンそのものと、その中に登場する人物の性格を、よりはっきりとかつ生き生きと読者の眼前へ提供しようとする意図以外には何物も持ちあわせているはずはない」と述べる。さらに、このメールヒェンの主人公テュスの性格付けに話が及ぶ。彼は世間に対して物怖じし、女性に内気な人間であるが、それこそ「内面の気分と、人生の様々な状況とのコントラスト」という「このメールヒェンを支配すべきコミックの根底をなすもの」にぴったりの人物なのである。ホフマンによれば、そのような主人公に対して、「彼をありとあらゆる種類の罠にかけて捕らえようと手こずるような厄介者を対置する必要があった」。その人物こそクナルパンティ（ホフマンの原文には「クナルパンティ」の「ル」が欠落している）なのである。読者の興味を引くために、「全体のコミックな精神に忠実であろうとするには、奇妙な先入観にとらわれて偏狭な悟性しか持っていない人間が、滑稽な形でエゴイスティックに描かれ、さらに、その人物に、きわめてファンタスティックな思考方法と行動形式を与えてやらなければならないかった」と続ける。しかし、その後で、ホフマンは自己弁護に移る。

「クナルパンティという名前で描き出されたカリカチュアが生まれ出たのですが、そのカリカチュアは、自由奔放なユーモアの領域を歩き回るメールヒェンがするご乱行を作家に許しているのです。ですから、この地上で、そのカリカチュアのオリジナルを探しても恐らく無駄なことでしょう。」<sup>34)</sup>

さらには、「ユーモアを旨とする作家には、ファンタジーの世界の中で、自由にまた活発に動き回ることが許されていなければならない」と弁明書の第1章を締めくくっている。

次に、出版人ヴィルマンスに、なぜ原稿の二カ所の削除を依頼したのかという疑念に対して、ホフマンは次のように釈明している。

「私の記憶違いでなければ、1月18日昼、ウンターデンリンデン通りにあるデュムラーの店の近辺で、ある若い男に初めて会ったのですが、私は、よくあることなのですが、その男の名前を知らずに、公共の場所で話をしました。」<sup>35)</sup>

だが、はたしてそれは本当だろうか。1月18日のヒッツィヒに宛てた手紙からは、ホフマンは当日、ウンターデンリンデン通りには行っていなかったことになる。「この日は一日中家にいた。なぜなら、リューマチの発作に襲われて、部屋に籠もっていなければならなかった」<sup>36)</sup>とその手紙に書いているからである。恐らく、弁明書にある若い男というのはホフマンの創作で、ホフマンが言いたかったのは、その若い男が叫んだことであろう。

「もうじきあなたの新しいメールヒェンが手にはいるのですね。そこには訴訟のことが書かれており、その中にはけっこうな人物描写があるそうじゃないですか。」<sup>37)</sup>

それを聞いたことにより、ホフマンは夜も眠れないほどになったというのである。つまり、誰となく、まだ彼のメールヒェンについて知りもしないのに予断によって語り、作家が創作した人物を読者は現に存在していると受け取り、ホフマンに敵意を持つこともあるのではないかと懸念するに至ったと記す。さらには、そのとき、長年患ってきた病気が四肢にまでおよび、不機嫌と疑惑が増加していたと続ける。

さらに、眠れぬ夜、ホフマンはテュスの訴訟の件で、誰か個人に関わるが見いだせないかと記憶を辿ったところ、ふと、宮中顧問官を描く際に、年配の同僚のことを書いたと受け取られるのではないかと、彼を敵に仕立て上げたと中傷されるのではないかと思い至ったというのである。年配の同僚とはもちろんカンプツのことである。当然の事ながら、ホフマンの念頭にはカンプツのことがあったのであり、カンプツも自分のことだと悟

ったわけであるが、ホフマンはそれを否定するように、メールヒェンの登場人物の誰かに、現実の人物を見いだすようなことがあったとしても、それは「病気にかかった心情から出たものでしかなく、もしも、かの同僚が私の作品を読んだとしても、理性的な男性が、創作されたカリカチュアに己の姿を認めるなどということは、まずあり得ないことであり、従って、私に対するいかなる嫌疑も消滅するに違いありません」<sup>38)</sup>と結んでいる。

二つ目の削除箇所（人々はクナルパンティが通り過ぎ、行ってしまった場合など、鼻をつまみたいくらいに思った）は、「後になってはじめて原稿の欄外に書き加えた物であり」、かつ「汚らしく余分に思われた」し、スモレットの『ペリグリン・ピクルの冒険』<sup>39)</sup>にヒントを得て書き足した物だったので削除を望んだのだと述べている。<sup>40)</sup>そして改めて、ホフマンには悪意がなかったことを強調する。

「あの極めて滑稽で非常に奇妙な事件を創作し完成させた際、断じて、悪意に満ちた下心など微塵も意識したことはなく、良心にやましいところがないと私自身感じています。私は、メールヒェンという制約、そしてその中に生じる諸状況と諸人物から燃え上がるファンタジーの飛翔に自由に従ったまでで、メールヒェンが活動するファンタスティックな領域の外にあるような他の事柄など考えてもいなかったのであります。」<sup>41)</sup>

弁明書の最後に、この作品の眼目は、その時代のもめ事や事件を対象とした諷刺作品ではなく、現実生活からくみ取ったイメージを、鏡に映るがごとく作品に反映させるユーモア作家のファンタスティックな産物であるということを見落とさないで欲しいと述べている。

弁明書という形をとっているにしても、ホフマンの権力に屈しない姿勢がそこには読みとれる。特に文学作品を権力側の意のままにさせたくないという強い意志が感じられる。弁明書が筆記されてからホフマンの死まではこの件に関して何も起



こらなかったようだ。その間に、ホフマンの病状は悪化し、ホフマンに対する処分は中断され、結局はホフマンの死によってこの事件は幕を閉じることとなる。

ホフマンの死の数ヶ月前、『蚤の親方』の最終部分が口述筆記され完成した。そして、問題とされた個所が削除された状態で、1822年4月に『蚤の親方』は出版された。出版前から諷刺の話題があったため、人々はこのメールヒェンを競って読んだ。しかし、ホフマンが不用意にも漏らし、訊問のきっかけとなった諷刺を期待していたひとたちにとっては、削除された作品は期待はずれの物であった。

作品が出版されてから80年以上経って、ベルリンの国家秘密資料室の書類の中から、ゲオルク・エリンガーによって削除された部分が発見された。彼は1906年に「ドイチェ・ルントシャウ」誌にクナルパンティ・エピソードを発表し、その後、ホフマン研究家ハンス・フォン・ミュラーによって最初の完全版『蚤の親方』が編纂され、現在われわれが目になっている作品となったのである。

# 注

- 1) 『ドイツ近代史』, S.38
- 2) 『ドイツ近代史』, S.39
- 3) 教育家。体操運動の指導者。学生運動の扇動者として逮捕される。
- 4) *Nachlese*, S.68
- 5) *Juristische Arbeiten*, S.361
- 6) Safranski, S.466
- 7) Safranski, S.457
- 8) Safranski, S.459
- 9) 『ビーダーマイヤー時代』, S.61
- 10) *Briefwechsel III*, S.113
- 11) *Aufzeichnungen*, S.490
- 12) *Juristische Arbeiten*, S.154
- 13) Safranski, S.464
- 14) *Briefwechsel II*, S.246ff
- 15) *Briefwechsel II*, S.263ff
- 16) *Briefwechsel II*, S.235
- 17) Hitzig, S.341
- 18) *Aufzeichnungen*, S.613f

- 19) *Aufzeichnungen*, S.614
- 20) *Briefwechsel II*, S.347f
- 21) *Späte Werke*, S.736f
- 22) *Späte Werke*, S.736ff
- 23) *Späte Werke*, S.737
- 24) *Späte Werke*, S.751
- 25) *Späte Werke*, S.751
- 26) *Späte Werke*, S.751
- 27) *Späte Werke*, S.751f
- 28) *Späte Werke*, S.752
- 29) *Späte Werke*, S.752
- 30) *Briefwechsel III*, S.235
- 31) *Briefwechsel III*, S.236
- 32) *Briefwechsel III*, S.244
- 33) *Briefwechsel III*, S.257ff
- 34) *Briefwechsel III*, S.257ff
- 35) *Briefwechsel III*, S.261
- 36) *Briefwechsel II*, S.346
- 37) *Briefwechsel III*, S.261
- 38) *Briefwechsel III*, S.261
- 39) スコットランドの小説家。1721-71。
- 40) *Briefwechsel III*, S.262
- 41) *Briefwechsel III*, S.262

# 1. Texte

E.T.A.HOFFMANN: *Meister Floh*. In: *Späte Werke*. Nach dem Text der Erstdrucke, unter Hinzuziehung der Ausgaben von Carl Georg von Maassen, Georg Ellinger und Hans von Müller(Meister Floh), mit einem Nachwort von Walter Müller-Seidel und Anmerkungen von Wulf Segebrecht, mit den Illustrationen von Theodor Hosemann zur ersten Gesamtausgabe von 1844/45 sowie 8 Illustrationen nach Callot und zwei Kupfern zum Erstdruck der "Irrungen". Darmstadt, 1978.

『蚤の親方』(池内紀訳), 世界文学全集 18, 集英社 1979。(『蚤の親方』からの引用は、池内訳を参照した。)

『蚤の親方』(深田甫訳), ホフマン全集 9 蚤の親方・最期の物語集 II, 創土社 1977。(「附録」, 「ホフマン論紹介」, 「作品解題」を参考にさせていただいた。)

E.T.A.HOFFMANN: *Nachlese*. Neubearbeitete Ausgabe. Nach dem Text der Erstdrucke und Handschriften herausgegeben sowie mit einem Nachwort und Anmerkungen versehen von Friedrich Schnapp. Mit acht zum Teil kolorierten Zeichnungen auf Tafeln und drei Skizzen im Text von E.T.A.Hoffmann. Darmstadt, 1981.

E.T.A.HOFFMANN: *Juristische Arbeiten*. Mit Erläuterungen herausgegeben von Friedrich Schnapp. Winkler Verlag, 1973.

E.T.A.Hoffmann in *Aufzeichnungen seiner Freunde und Bekannten*. Eine Sammlung von Friedrich Schnapp. München, Winkler Verlag, 1974.

E.T.A.HOFFMANN: *Briefwechsel*, 3 Bde. München, Winkler Verlag, 1969-1969.

## 2. Sekundärliteratur

ベーン, マックス・フォン:『ピーダーマイヤー時代—ドイツ 19 世紀前半の文化と社会』[第二版] (飯塚信雄, 永井義哉, 村上雅人, 高橋吉文, 富田裕共訳), 三修社 2000。

HITZIG, Julius Eduard: *E.T.A.Hoffmanns Leben und Nachlass*. Mit Anmerkungen zum Text und einem Nachwort von Wolfgang Held. Insel Verlag, 1986.

HOFFMANN, Alfred: *E.T.A.Hoffmann. Leben und Arbeit eines preußischen Richters*. Baden-Baden 1990.

木野光司:『ロマン主義の自我・幻想・都市像—E.T.A. ホフマンの文学世界』, 関西学院大学出版会 2002。

木谷勤/望田幸男編著:『ドイツ近代史—18 世紀から現代まで—』, ミネルヴァ書房 1996。

前川道介:『楽しいピーダーマイヤー 19 世紀ドイツ文化史研究』, 国書刊行会 1993。

ロータース, エーバーハルト:『E.T.A. ホフマンの世界生涯と作品』(金森誠也訳), 吉夏社 2000。

SAFRANSKI, Rüdiger: *E.T.A.Hoffmann. Das Leben eines skeptischen Phantasten*. Carl Hanser Verlag, 1984.

ザフランスキー, リューディガー:『E.T.A. ホフマン ある懐疑的な夢想家の生涯』(識名章喜訳), 法政大学出版局 1994。(ザフランスキーからの引用は, 識名訳を参照し, ほとんどの部分でそのまま使用したが, 一部変更したところもある。)

梅内幸信:『童話を読み解く—ホフマンの創作童話とグリム兄弟の民族童話—』, 同学社 2001。

吉田六郎:『ホフマン—浪漫派の芸術家』, 勁草書房 1971。

## Der verfolgte Richter

— über Knarrpanti-Episode —

Takeshi KASHIMA

In dieser Abhandlung untersuchen wir, wie sich E.T.A.Hoffmann sowohl als Richter wie auch als Schriftsteller mit den damaligen politischen Situationen und mit den Behörden auseinander gesetzt hat.

In Berlin wurde Hoffmann zum Mitglied einer soeben von König neu gebildeten Untersuchungskommission ernannt, die den Auftrag erhielt, gegen politische Straftäter, die sogenannten “Demagogen” zu ermitteln. Die Kommission hielt sich so gewissenhaft an rechtsstaatliche Grundsätze, dass es schließlich zum Konflikt mit den politisch maßgeblichen Kreisen um den Minister Fürst Wittgenstein, den Staatskanzler Hardenberg und den Polizeidirektor Kamptz kommen musste. Hoffmann selbst wurde zuletzt zum Verfolgten.

Der *Meister Floh* enthielt beißenden Spott auf Kamptz. Einzelheiten hatte Hoffmann bereits vor der Veröffentlichung in seinem Bekanntenkreis und im Weinhaus ausgeplaudert. Kamptz reagierte prompt. Er schickte einen Polizeiagenten mit der Aufgabe, den Druck zu verhindern und das Manuskript zu beschlagnahmen. Die inkriminierten Passagen fanden sich im vierten und fünften Kapitel des Märchens. Es handelt sich um die später berühmt gewordene “Knarrpanti-Episode”, in der Hoffmann von seiner intimen Aktenkenntnis Gebrauch gemacht und sogar nachweislich aus den Prozessunterlagen zitiert hatte.

Kamptz hat sich in Knarrpanti wiedererkannt. Hoffmann wurde verhört. Er schreibt die Verteidigungsschrift, in der er aus der Logik des Märchens beweist, dass er eine solche Figur wie Knarrpanti habe auftreten lassen müssen, um der künstlerischen Ausgewogenheit willen. Ähnlichkeiten mit lebenden Personen seien unbeabsichtigt. Wer sie sucht, würde immer fündig werden, dagegen sei kein Autor geschützt, das sei schon vielen passiert.

Der König und der Justizminister haben im Hinblick auf Hoffmanns Erkrankung überhaupt keine Entscheidung getroffen. Der *Meister Floh* erschien Ende April 1822, also zwei Monaten vor dem Tod Hoffmanns, in zensierter und gekürzter Fassung.

Die zensierten Textteile hat Georg Ellinger über achtzig Jahre nach dem Erscheinen des Märchens in den Akten des Geheimen Staatsarchivs in Berlin entdeckt. Und 1908 besorgte der Berliner Literaturhistoriker und bekannte Hoffmann-Forscher Hans v. Müller die erste vollständige Ausgabe des *Meister Floh*.